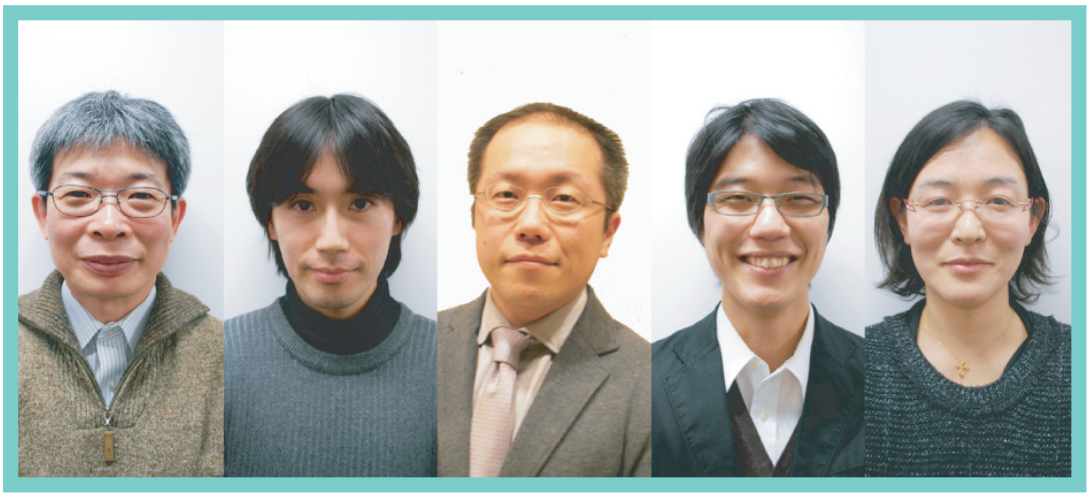
演劇ワークショップをコアとした地域防犯ネットワークの構築



楽しく参加できる演劇ワークショップで経験した防犯の知識や経験は、記憶に長く定着する

演劇の持つ"気づきの力"が防犯意識の定着、向上に役立つ

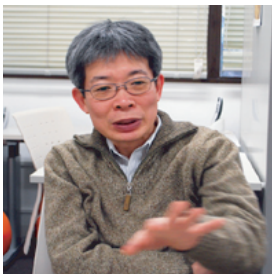
平田オリザさんが代表者を務めるプロジェクト「演劇ワークショップをコアとした地域防犯ネットワークの構築」では、演劇ワークショップの手法を用いた防犯啓発劇を子どもたち自らがつくるというユニークな活動を展開します。さらに、その成果を防犯効果の実証データとして組み上げて、継続可能な施策を構築。自治体などへの政策提言も視野に入れています。防犯と演劇。このふたつはどのように混ざり合い、効果を生み出していくのでしょうか。プロジェクト代表者の平田オリザさんに加えて、各グループから伊藤京子さん、小林健司さん、蓮行さん、山口洋典さんにお話を伺いました。

【プロジェクトの概要】

本プロジェクトでは、演劇の手法を用いた防犯ワークショップを実施。協力者である小学校や研究者らとともに、効果測定を行い、政策提言にまとめます。また、それらと同時に、演劇ワークショップを運営できるコミュニケーションティーチャーを育成。さらに、演劇ワークショップが学べるWebコンテンツの制作など社会実装に向けたさまざまな取り組みを展開します。

研究期間：平成21～24年度

実施体制：防犯コミュニケーションティーチャー育成グループ（プロジェクト代表者　平田オリザ　他）
防犯ワークショップコンテンツ開発グループ（代表者　蓮行　他）
社会実験・評価グループ（代表者　坂野充　他）
政策化・実装グループ（代表者　山口洋典　他）
Webコンテンツ開発グループ（代表者　伊藤京子　他）



演劇が持つ防犯効果を科学的な裏付けのある形につくり上げたい

プロジェクト代表者：防犯コミュニケーションティーチャー育成グループ　平田オリザ
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　教授

●●● 演劇が持つ防犯効果はすでに海外では認知されている

私には大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授のほか、さまざまな肩書きがありますが、本職は劇作家です。ですから私の本業は、演劇をつくることです。長年にわたって、演劇をつくってきたなかで、実感がどんどん深まっているのは、演劇は広い可能性を持っているということです。演劇はただ、芝居をつくり、観劇するというだけでなく、社会の仕組みを学ばせてくれたり、コミュニケーション能力を育んでくれたりする力があり、それはさまざまな分野に応用していくことが可能なんです。

私がこのプロジェクトに参加することになったのも、防犯というジャンルにおいて、演劇は大きな役割を果たせるという事実を実証したかったためです。海外でも、演劇の持つ力についての研究はさかんに行われています。私もカナダの大学で、演劇の手法を防犯に用いる授業を見せていただく機会がありました。カナダから帰国してみたら、蓮行さんから「一緒に、防犯と演劇の関係性を科学的に検証するプロジェクトに参加しませんか？」という提案をいただきました。プロジェクトとして応募しようとしていた「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域は、目標が防犯に限定されていましたし、科学的な効果検証や社会実装も想定されていました。そこにはとても魅力を感じました。なぜなら、それがとても困難なことに思えたからです。困難だからこそ、やりがいがありそうだ、と。

●●● 教育者の育成や政策を提案し、演劇ワークショップの普及に務めたい

演劇を通じて防犯意識を高めること、それ自体は難しくはありません。たとえば、親子間や地域で、コミュニケーションが促進されれば防犯につながることは想像しやすいと思います。演劇は、多種多様な人が参加してひとつの舞台をつくりあげます。人との関わりが必須なわけです。また、ふだん演劇に触れない人にとっては、特殊な体験となります。演劇ワークショップを開催すると、親御さんから「ふだんは無口な子が、ワークショップについて熱心にずっとしゃべっていた」という報告を受けることは珍しくありません。すなわち、コミュニケーションの促進において演劇が大きな役割りを果たすことは、実体験としては間違いない。

このような、自身が感じてきたことを、数値データに落としこみ、実証したいんです。いまは、その効果測定の方法について検討をすすめているところです。

防犯意識を高めるために重要な要素のひとつに、具体的な防犯の方法を覚えておくということがあると思いますが、たとえば演劇には記憶を長く定着させる力があるように感じています。そこで、時間経過にからめて、定着度合いを測定していく方法があるのではないかと考えています。また、社会実装については、演劇ワークショップを運営できるコミュニケーションティーチャーを増やしたいと思っています。そして同じように演劇の手法を使った防犯を指導できる警察官も増やせるといいですね。

演劇をつくることそれ自体はアーティストの仕事です。アーティストは地域のことを学び、地域に根付くようなワークショップを提供していくことが重要ですね。また、教師のみなさんや警察官のみなさんに積極的にワークショップを体験していただき、コミュニケーションティーチャーになるべく、手法を学んでいただきたいと思います。さらに、NPOや行政などに積極的に働きかけて、演劇の手法を取り入れた防犯ワークショップを広めていくことも社会実装と言えるでしょうね。

●●● 演劇ワークショップに参加すれば、誰でもその効果の大きさが実感できる

演劇の手法を取り入れた防犯ワークショップに期待することは、複雑でごちゃごちゃしたものをそのまま伝えることができるのではないかということです。演劇というものは、複雑でごちゃごちゃとしたものなのですが、社会も同じですよね。そういった複雑なものは、単純化や簡略化を図ると本質を見失うこともあります。複雑にものごとがからみあっていることそれ自体が社会であり、それを受け止めなくては実像は見えてこないというわけです。演劇の手法を使えば、そのごちゃごちゃをありのまま受け止めることができるのではないでしょうか。

演劇の力は参加すれば誰もが理解できるものです。机上の勉強は成績に大きな格差が生まれますが、演劇では、それほど格差が生まれません。つまり、参加した多くの人が興味を持って楽しみながら、何かを学ぶことができる。そのような点からも、演劇を通して何かを教えることの可能性を感じずにはいられません。年齢差も

性差も越えて家庭も地域も包み込むことのできる演劇。少しでも多くの人に参加してもらい、防犯の強化に役立てて欲しいと思っています。

危険が近づいたときに
柔軟に対応できる力を身につけてほしい

防犯ワークショップコンテンツ開発グループ　グループリーダー　蓮行
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　特任講師

●●● 防犯ワークショップには二次的、三次的な防犯効果もある

私が今回このプロジェクトに参加しようと思ったのは、本当にふとしたきっかけからでした。私は1995年から、小劇場で活動する劇団衛星を主宰しています。演劇の上演などを手がけているのですが、私には演劇が持つ教育分野への力にも関心があり、日常生活において感情の表現が豊かになるなど、演劇力の研究も行っています。これまでにもそのような観点から、たとえば算数ができるようになる演劇や環境問題への理解が深まる演劇などをつくってきました。そんな私のバックボーンを知る知人がこのプロジェクトの存在を私に教えてくれたというわけです。

演劇の手法を用いた防犯ワークショップの効果については、平田さんから話がありましたが、もう少し説明を加えさせていただきます。演劇を学ぶとコミュニケーション能力が高まる可能性があると言われています。コミュニケーション能力が不足していると、犯罪などのトラブルに巻き込まれたときに、周囲の信頼できる大人に相談するなど適切な対処ができなかったりする可能性もありますが、演劇には、普段接することが少ない異質な大人たちとも交流が図れるという面もあるのです。効果測定に関しては平田さんも述べているように高いハードルを感じているのが実際のところです。評価軸の検討からはじめて、粘り強く研究を重ねることが大切だと思います。

●●● 勧善懲悪ではない社会が理解できる演劇ワークショップを

このプロジェクトにおける私の役割は演劇の手法を使った防犯ワークショップをつくりあげるということです。いまは、どのようなワークショップがもっとも効果的なのかを研究している段階にあります。

危険、安全をシンプルに見分けられる勧善懲悪なワークショップならば、さほど苦もなく、つくれるかもしれませんが、複雑化した社会や犯罪を前に、それがもっとも効果的かと聞かれると疑問を感じます。ワークショップでは、パターン化したケースを学んで対処法を覚えていく、というより、危険が近づいたときに柔軟に対応していける考え方の土台のようなものを身に付けていただくのが理想だと考えています。よいワークショップが組み上がるよう研究を続けたいですね。

防犯ワークショップの効果を
測定するための概念図の作成等を行っています

社会実験・評価グループ　小林健司
NPO法人JAE（日本教育開発協会）　教育クリエーター

●●● これまでの演劇ワークショップをつくってきた経験を活かしたい

私は普段はJAEというNPOで仕事をしています。JAEのミッションは、学校と企業、大学生と企業などをつなげる架け橋になることです。仕事の現場が知りたい大学生たちに、企業を見学するなど、仕事を具体的に知る機会をつくったりしています。そのような環境を整えることで、夢を具現化させたい若者の支援を行っています。

今回、私がこのプロジェクトに参加したのは、もともと蓮行さんが主宰する劇団衛星のワークショップ制作などにJAEとして携わらせていただいていたことにあります。以前から演劇ワークショップなどを手がける際に、ワークショップづくりのアドバイスをさせてもらったり、効果測定やレポートの制作などを

担当させていただいたりしたんです。その関係からお声がけいただいたのですが、私も話を聞き、JAEやJAEの協力組織の力を借りれば、役立てることもたくさんあるのではないかと思って参加させていただくことにしました。

●●● 防犯だけでなく、さまざまな分野に活かせるような土台になれば

プロジェクトにおける私の役割は防犯ワークショップの効果測定をすることです。現在は、測定する効果を特定するために、ワークショップに参加した教員、保護者の方々、コミュニケーションティーチャーたちにインタビュー取材をしてさまざまな情報を得るなかで、ワークショップがどこに、どんな影響を及ぼすかということについての概念図を制作しています。

たとえば、どんなところに影響を及ぼすかという部分では、子ども自身やその保護者、地域、学校などをカテゴリー化。また、ワークショップで得たことを知識と態度に分けて考えていますが、その中でどこが測定可能か不可能かを検討し、今後の検証に役立てていく予定です。

現段階では、効果測定はワークショップ前と直後に実施します。さらに、ワークショップを終えてから1ヵ月後、3ヵ月後、1年後などにも測定できると理想的ですが、時間の経過の中で、防犯に対する知識や態度の変化する要因を特定するのが難しくなるので、測定方法については今後も試行錯誤が必要だと思われます。結果が出てくるまで、長い時間がかかりそうですが、力を尽くしたいと思います。また、今回の効果測定の研究は防犯というテーマで実施していますが、演劇やワークショップのもつ効果については多くの人に活用してもらえるような普遍性のあるものに仕上げられればと思っています。

劇空間から地域、行政へと
視点と視野を広げて提言をまとめたい

政策化・実装グループ　グループリーダー　山口洋典
同志社大学政策学部　総合政策科学研究科　准教授

●●● 劇空間が及ぼす人やまちへの影響に、理論と実践から迫っています

同志社大学の大学院で総合政策科学研究科のソーシャル・イノベーション研究コースの准教授をしています。世直しと人助けの実践的な研究を進めるコースなのですが、その教員の仕事と浄土宗應典院というお寺の僧侶も兼務しています。お寺で働きながら、キリスト教主義の大学で教えている、そんな仏教とキリスト教のハイブリッドな身であることが、今、このプロジェクトで役割をいただけたことにつながっている気がしています。應典院は開かれたお寺を目指し、1997年の再建以来、劇場仕様の本堂ホールで演劇を中心としたイベントが積極的に開催されてきています。こうした活動の原点は、1995年、若者たちに希望を見た阪神・淡路大震災と、絶望する若者たちを見たオウム真理教事件です。再建計画のまっただ中で、古くからある仏教寺院は人々にとって魅力のある存在なのか、また地域の中でどのような役割を果たせるのか。時代の空気を捉えられていなかったのではないかという問い直しから、地域のネットワークの拠点として再生されることを願い、お寺を開放することにしたんです。

このプロジェクトの代表を務める平田さんも再建の初年度、應典院にお招きしています。私は2006年から應典院の住職に招かれ、その後に得度した新参者なのですが、平田さんは当初から公共空間としての劇場のありように関心を持ってくださっていたと伺っています。私がプロジェクトに参加しているのは、平田さんが関心を抱く應典院の立場があることと、大学で政策という名のつく部署にいることが重なって居ることが縁となったのでしょう。専門は社会心理学の中でも人間関係を特に注目する集団力学です。“人とまち”、そして“表現と空間”、それらの関わりをひもときながら、いかにして実践の知を政策として実装化を促進するか、その役目をいただきました。

●●● 政策提言にまとめるために、ツールとロールとルールを明確にしたい

私のグループは他のグループの取り組みを政策化することです。ここでの政策化とは、防犯ワークショップの内容や効果をもとに、問題解決のツールとして演劇を用いた取り組みが各地で導入されていく手順や方法をまとめあげることです。

具体的には、さまざまな地域に出かけてタウンミーティングを開いています。いわゆる質的研究により、データの収集や枠組みの検討などを行っています。“なぜ劇団が劇場以外で公演をするのか”、“学校と地域はど

のように関わるのか”、“地域自治と議会はどうあるべきか”、“町内会とNPOと行政との連携は？”、こうしたテーマを個別に掲げて、防犯と演劇に関する視点と視野を広げていっています。

これらを通じて明らかにしたいのは、防犯ワークショップのツールとロールとルールです。誰がどのような役割を果たしながら、どんなものを使って、何をすれば防犯体制が強化されていくのか。それを見極めていきたいですね。一定のモデル化はできたので、それをもとにどんな政策案を提示できるか、次の大きな課題です。

すでに見えている効果をどのように測定するかがコンテンツ制作の鍵になる

Webコンテンツ開発グループ　グループリーダー　伊藤京子
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター/大学院基礎工学研究科　助教

●●● 子どもの成長を促すという防犯ワークショップのスタンスが興味深い

私は大阪大学のコミュニケーションデザイン・センターで教員をしています。専門分野はヒューマンインタフェースという工学の一分野。具体的には、人と人、人とモノを取り持つものの設計をしています。取り持つものとは、たとえばソフトウェアの場合もあれば、ハードウェアの場合もあります。コミュニケーション支援をターゲットに、ソフトウェアやハードウェア開発の研究をしているんです。

防犯というテーマでは、もともと大阪府からの受託研究でロボット社会実証実験のプロジェクトに携わった経験があります。子どもたちにタグを付けて登下校してもらうことで子どもたちの登下校の情報を把握。その結果を小学校教員や保護者に共有してもらって、意識の高まりなど防犯への貢献度などを調査しました。要するに、タグの配布といった仕組みづくりから防犯に取り組んだ枠組みを調査したのですが、今回のプロジェクトは、仕組みではなく、子どもの成長を促すという側面が強いです。お声がけいただいたときに、とても興味深く、参加させていただくことを決めました。

●●● 経験から感じていることを、証明していきたい

プロジェクトで私が携わっているのはワークショップを紹介したり、ワークショップの効果など具体的な成果を発表したりするWebコンテンツの制作です。工学の視点から情報技術の力を使って、この演劇ワークショップに少しでも役立つようなものを提供できればと思っています。

まだコンテンツ制作は方向性を固めているような段階で、具体的な形となるのはこれからです。でも、演劇ワークショップを通じて、子どもたちに変化が生じること、それ自体はワークショップに関わった多くの人が感じていることです。たとえば、演劇ワークショップを行った小学校の先生からも「あの子があんなに大きな声を出せるなんて」というような驚きの声がありました。そういった先生や保護者の反応が、子どもたちにフィードバックされることも、子どもにとっていい影響になることを実感しています。重要なのは、その測定方法だと思います。測定可能なポイントをうまく捉えて、システムに落としこんでいくこと。それを考えながら設計したいですね。

【取材を終えて】

防犯ワークショップが子どもによい影響を与えるであろうことは、話を聞いていてよくわかった。また、平田さんらがハードルを感じている効果測定に関しても、その難しさが理解できた。演劇が及ぼす防犯効果を示し、多くの協力者を募り、実施回数を増やしていくこと。やがて大きな説得力を持つようにするためには、その経過の中で蓄積されたデータが必要であるように思った。

取材・文　井上晶夫